

— 原 著 —

シェリーの未完成の詩, “The Triumph of Life” の研究

上 野 和 廣

A Study of Shelley's Unfinished Poem “The Triumph of Life”

Kazuhiro UENO

Abstract

Shelley's “The Triumph of Life” was left unfinished because of the poet's accidental death. Shelley scholars have debated on how he might have finished the poem. The focus of this paper is to clarify Shelley's original design for this poem. In the first place, it contends that the fresco called ‘Triumph of Death’ in the Camposanto in Pisa gave Shelley the inspiration to write the poem. Secondly, the paper discusses a matter of two texts of “The Triumph of Life”, namely Mary Shelley's and Donald H. Reiman's texts. The readers who read the poem edited by Mary Shelley would have the impression that the poem was completed and composed from a very pessimistic point of view. T. S. Eliot read Mary Shelley's text and spoke highly of this poem because of the pessimism. On the other hand, the readers who read the poem edited by Donald H. Reiman would have the impression that the poem is uncompleted and Shelley had the intention of completing the poem. Most of today's Shelley scholars have recognized the poem edited by Reiman as the most reliable one. Thirdly, the paper concludes that “The Triumph of Life” is unfinished and Shelley intended to write the latter half of the poem which would be full of optimistic idealism because his central purpose of composing the poem was to scatter “the germs of the flower and the fruit of latest time.”

キーワード : 未完成 unfinished 死の勝利 triumph of death
世俗的な人生を送る人々の凱旋行進 triumph of life
真の悪 true evil 詩人の使命 a mission as a poet

パーシー・ビッシュ・シェリー (Percy Bysshe Shelley, 1792-1822) が代表作の『鎖を解かれたプロメテウス』(*Prometheus Unbound*, 1820) を書いた動機を、アイスキュロス (Aeschylus, 525-456 BC) の『鎖を解かれたプロメテウス』の弱気な結末が嫌だったからだと、作品の「序文」の中で述べている (MW 229)。アイスキュロスは古代ギリシャの3大悲劇詩人の一人で、プロメテウス3部作を書いている。ギリシャ神話の神、プロメテウスの物語を題

材とした悲劇で、『鎖に縛れたプロメテウス』だけが現存しており、残りの『火を運ぶプロメテウス』と『鎖を解かれたプロメテウス』は断片だけ残っている。そこから推測されるアイスキュロスの物語の展開は次のようになる。プロメテウスは天のジュピターのもとから火を盗み、愛する人類に与える。それを知ったジュピターは、プロメテウスを岩山に磔にし、鷲に肝臓を食べさせるという刑に処す。プロメテウスはその苦しみを耐え忍ぶものの、最後には彼だけが知っている秘密、つまりジュピターが女神テティスと結婚することになれば彼の帝国は危機的状況になるという秘密を、ジュピターに教えることで、両者は和解し、プロメテウスは解放される。この粗筋を知っていたシェリーは、せっかくプロメテウスが長年苦しみを耐え忍び続けたことが、ジュピターとの和解という安易な妥協によって台無しになっていると見なし、アイスキュロスの作品を嫌った。そのために、シェリーは独自の『鎖を解かれたプロメテウス』を書くことにしたのである。彼の作品では、ジュピターは人類の圧制者として、プロメテウスはジュピターの残忍な仕打ちに耐える人類の擁護者として描かれる。シェリーのプロメテウスは最後まで秘密を漏らすことなく、ジュピターを憐れみつつも破滅に追い込む。その結果、プロメテウスは解放され、愛する女性アシアと結ばれる。暴君が去った世界には愛と平和が訪れ、美しい理想の国となる。シェリーの作品では理想社会の実現に向けて努力し苦悩する人たちのシンボルとしてプロメテウスが描かれている。

シェリーの白鳥の歌となった“*The Triumph of Life*” (1822) にも同じように創作のきっかけとなった作品がある。これは文学作品ではなく、イタリアの町ピサにある“*Triumph of Death*”というフレスコ画である。ピサは斜塔で有名で、世界中から多くの観光客が訪れる。斜塔近くのドゥオーモや洗礼堂は多くの人を訪れるものの、同じ敷地内にあるカンポサント (Camposanto) を訪れる人は少ない。“*Triumph of Death*”はこの場所に描かれている壁画である。カンポサントとはイタリア語で「聖なる所」を意味し、実際には墓地であることが多い。ただ、ここは納骨堂になっている。この場所にまつわる伝説があり、12世紀に行われた第4回十字軍がゴルゴタの丘¹⁾の土を持ち帰り、ここにまいたと言われている。そのために、13世紀になってからその土がまかれたとされる場所に納骨堂が建てられたのである。その後、14世紀から15世紀にかけて、その建物の壁にフレスコ画の「最後の審判」、「地獄」などが描かれた。同じ頃に“*Triumph of death*” (原題は‘*Trionfo della Morte*’で、「死の凱旋」又は「死の勝利」と一般に訳されている) も描かれたのである。この壁画のモチーフは「死を忘れるな」(memento mori) で、馬に乗った三人の金持ちが三人の僧侶らしき死者に遭遇する場面などが描かれている。この「三人の生きた者が三人の死者に逢う話」(legend of meeting of the three living and the three dead) は、13世紀頃のフランスで作られたと言われている。生きている三人は、富、名誉、権力を象徴し、三人の死者は、死んでしまえば、富も名誉も権力もすべて無価値になることを暗示している。この話は、そうしたものに囚われて生きることのないようにという警告になっている。この話に関連したものとして、「死の舞踏」(dance of death) がある。擬人化された「死」が身分の高い者も低い者も、金持ちも貧乏人も関係なく、みんな一緒に踊りながら墓場まで連れてゆく話である。「死の舞踏」は、死はすべてのものに平等に訪れることの教えになっている。この話は中世から存在していたが、黒死病が大流行した14世紀頃

から“Triumph of death”と共にヨーロッパで広く知られるようになり、絵画の題材としてよく扱われるようになっていく。

シェリーがカンポサントのあるピサを訪れたのは、1820年1月26日のことである。1818年にイタリアに渡ったのちベネチア、フィレンツェ、ローマ、ナポリなど、各地を転々と移り住んだシェリーであるが、ピサを訪れた後は亡くなるまでこの町を中心に活動している。シェリーの友人であり、イギリスを代表する詩人のひとり、バイロン（George Gordon Byron, 1788-1824）も1821年11月1日にこの町にやってくる。1822年3月には、シェリーが危うく命を落としかけた事件にバイロンと共に巻き込まれている。二人が仲間たちと馬に乗ってピサの郊外へ遊びに行った帰り、町の門の近くまで来たとき地元の軍人ともめ事になり、その軍人にシェリーがサーベルで切れそうになったのである。ピサ滞在中、バイロンだけでなく、従兄妹のトーマス・メドウィンや友人のリー・ハントもシェリーに会いに来ており、シェリーはこの人たちと共にカンポサントを訪れ、その折に“Triumph of Death”のフレスコ画を見たものと思われる（Bieri 543, 645）。

この壁画に刺激を受けて、“The Triumph of Life”の執筆に取り組むのは1822年5月のことである。しかしながら、2か月後の7月、愛用のヨット、ドン・ジュアン号に乗っていたとき、嵐で難破して亡くなったために作品は未完成に終わっている。“The Triumph of Life”はテルツァ・リーマ（terza rima）という詩形で書かれている。これは3行でひとつのスタンザを構成し、脚韻の踏み方はaba bcb cdcとなり、英詩では弱強五歩格が用いられる。テルツァ・リーマはダンテの『神曲』（*Divina Comedia*, 1307-21）で用いられて有名になったが、英詩の代表作としてはシェリーの「西風に寄せる頌歌」（“Ode to the West Wind”）が現在でも一番に挙げられることが多く、シェリーの得意とする詩形であった。

“The Triumph of Life”の内容は次のようなものである。イタリアのアペニン山脈にある山の斜面で、夜もすがら考え事をして眠れなかった語り手が、栗の木の下に座り込んだまま、次第に夜が明けてゆく様子を見ている。いつの間にか眠気に襲われるのだが、語り手は寝てしまうことなく、ある幻想を見ることになる。彼は夕暮れ時の夏の埃っぽい公道に立っていることに気づく。道を行きかう人々の姿はまるでブヨの大群のように見える。その群衆の中の人々は誰もなぜ自分がその群集の中にいるのか、自分がどこから来たのか、どこへ行くのか知らないまま歩いている。大勢の老若男女が恐怖や悲しみに打ちひしがれ、渴きと疲れを感じながら花の咲くことのない道を歩いてゆく。そこへ一台の馬車がやってくる。御者はヤヌスのように四つの顔を持つが、いずれの顔も目隠しをされているので目が見えない。馬車の中には征服者である「生」が座っている。人々はその馬車の後を狂ったように歌い踊り、凱旋行列のように付いて行く。ただ、世俗の誘惑に屈することのない尊敬すべき少数者（“the sacred few”, 128）だけは付いて行かない。馬車の前を行く若者たちはその馬車に轢かれてしまい、後からついて行く年寄りたちは朽ち果てて土へと帰っていく。そのような光景を見ていた語り手が「これは何だ、車の中にいる者は誰だ」（“And what is this? / Whose shape is that within the car?”）（177-78）とひとりつぶやく。「生だ」（“Life”）（180）という答えがどこからか聞こえてくる。返事があった方向を見ると、いびつな形の古い木の根のように見えるものがある。よく見ると

ルソー (Jean-Jacques Rousseau, 1712-1778) の変わり果てた姿であることが分かる。そのルソーの説明によると、行列の人々は賢人や偉人、名もなき人々であったが、己を知ることなく「心の内なる反乱」(“the mutiny within”) (213) を押さえられずに、純粋さを失い、「生」に負けてしまった者たちである。ナポレオン、フリードリヒ大王、アレキサンダー大王、ヴォルテール、カント、プラトン、ローマ皇帝やローマ教皇たちの名前が、「生」に負けた者たちの例として挙がる。いずれも歴史上有名な人物であり、富や名誉、権力などを手に入れた立派な人物であったが、人々を本当に幸福にすることができなかったために、生の凱旋行列に加わったのである。このような説明をした後、ルソーは自分の生涯について比喩的に語る。ある春の日に洞窟の中で目をさまし、森の中へ入っていった。アイリスのように美しく輝く姿に導かれていくが、自分の思いが燃えさしのように消されてしまった時、人生とは何かについてアイリスのような姿をした者に訊ねる。するとネペンテス (苦痛や憂さを忘れさせる薬) の入ったクリスタル・ガラスの杯を差し出される。飲み干すとそれまでの記憶が次第に消えてゆき、新しいヴィジョンが現れる。それは影のある世俗的な欲望に動かされる現実の世界であった。結局ルソーも「生」の囚われの身となり、踊りの輪の中に入っていく。しかし、踊ることに疲れ果て、道端に座り込んでしまう。ここまでルソーが話したところで、語り手が「生とは何なのか」(“Then, what is Life?”) (544) と、問いかけたところで作品は終わっている。

この作品の題名の日本語訳は様々で、『生の勝利』、『人生の勝利』、『人生の凱旋』、『世俗の凱旋』、『現世の凱旋行進』など、それぞれ訳者の作品解釈に従って異なる題名が付けられてきた。詩の内容から考えると、詩の語り手が幻想の中で凱旋行進をする人々の群れを見ることが基本設定になっているので、その部分を重視すると、“triumph”の訳語としては「凱旋」を用いることが適切に思える。また、凱旋行進する人々は、人生の本当の勝利者として喜びに溢れた姿が描かれているわけではない。むしろ人生における敗者として描かれている。現世の世俗的な欲望を空しく追いかけて死んでいった人々としてこの作品では捉えられている。従って、“Life”の訳としては、単に人生とか生とかではなく、世俗的な生き方とする方が妥当である。しかし、“The Triumph of Life”という短い言葉に対して、『世俗的な人生を送る人々の凱旋行進』という題名は少々冗長になるので、それぞれの訳者が簡潔な題名にしようと様々な作品解釈を行い、工夫した結果が多様な訳に結びついたと思われる。『生の勝利』という題名については、シェリーの作品がカンボサントの“triumph of death”の影響を受けて創作されたことを意識したもので、この“triumph of death”が一般的に「死の勝利」と訳されていることを受け、それに対応した訳として「生の勝利」としたものである。この訳の場合、この世での名声や富を手に入れたところで、あの世まで持っていくことのできない空しいものあり、そのようなものに執着して生きることは、あるべき人生から見ると敗北であり、結局勝利するのは世俗的な「生」そのもの、むき出しの「生」であるという解釈になる。

“The Triumph of Life”は未完であるにもかかわらず、妻のメアリ・シェリー (Mary Wollstonecraft Shelley, 1797-1851) が1824年に出版した『遺稿詩集』(Posthumous Poems)の中に収録したために世に知られるようになった。しかし、書きかけの断片をメアリが自分の解釈でつなぎ合わせて一つの作品として発表したものなので、テキストとして信頼に足るもの

ではなかった。そのため、今日に至るまで、多くのシェリー研究者がシェリーの手書き原稿を丹念に調べて、それぞれの解釈に基づき修正を加えることになった。こうした事情により、現在においても詩の内容の一部が少しずつ変更されているので、その影響も受けて作品の解釈も微妙に変わることになり、様々な議論を呼ぶ作品になっている。この論文では現在までの手書き原稿研究による一番大きな修正点だけ指摘しておきたい。メアリの『遺稿詩集』に収められた作品では、「人生とは何ぞや 私は叫んだ」(“Then, what is life? I cried.”) (544) で終わっている。これに対して、最近の詩集に収められたものでは、次の部分が追加されている。

‘Then, what is Life?’ I said . . . the cripple cast
His eye upon the car which now had rolled
Onward, as if that look must be the last,

And answered . . . ‘Happy those for whom the fold
Of

(544-48)

「それでは 生とは何か」私は言った 手足の不自由な者は
今しがた走り去った車に目をやった
その一瞥が最後であるかのように

そして答えた あの者たちは幸せ 群れ

『遺稿詩集』では「人生とは何ぞや 私は叫んだ」というやや芝居がかった主人公の独白とも受け取れる問いかけで終わっている。これに対して、最近の詩集では上記の一節が追加されることで、叫ぶのではなく、単に生きるとはどういうことか問いかける形で終わっている。この問いかけは手足の不自由な者となったルソーに対するものであることが明確であり、ルソーが走り去る車を見ながらこれから答えようとするところで終わっていることになる。最後の部分を付け足したテキストを最初に出版したのは、アメリカのドナルド・H・ライマンで、1965年に集注版 (A Variorum Edition) として出版した。これに対して、5年後の1970年にイギリスのオックスフォード・スタンダード・オーサー・シリーズ (Oxford Standard Authors) として出版された『シェリー詩集』 (*Shelley: Poetical Works*) では、編集者のG・M・マシューズはライマンの修正を採用することなく、メアリ編集の『遺稿詩集』のテキストのまま出版した。世界的にはオックスフォード大学出版の詩集の方が定本として認められているので、20世紀後半の多くの読者は「人生とは何ぞや 私は叫んだ」と、読者に問いかけるところで終わっている作品として読んでいた。しかしながら、その後、オックスフォード大学はシェリー研究者のマイケル・オニールが中心となり新たに編集をやり直し、2003年に Oxford World's Classics として『パーシー・ビッシュ・シェリー主要作品集』 (*Percy Bysshe Shelley: The*

Major Works) を出版した。この作品集において、ようやくライマンのテキストを基本にしたものへと変更がなされ、こちらのテキストが定本となった。

『遺稿詩集』のテキストで読むと、形式的には未完成の作品であるが、内容としては「人生とは何ぞや」と、読者に生きる意味を問いかけるオープン・エンディングの形をとっており、一応完成された作品として読むことができる。シェリー自身これ以上書くつもりはなかったと捉えると、絵空事のような理想の世界を美しく描いてきただけのシェリーも、死ぬ直前になって少しは大人になり、ようやく現実を直視した作品を書くようになったという解釈が成り立つ。ノーベル文学賞を受賞したイギリスの作家、T・S・エリオット (Thomas Stearns Eliot, 1888-1965) はシェリーを嫌っていたが、唯一褒めた作品が“The Triumph of Life”であった²⁾。彼は『遺稿詩集』に掲載されていたテキストを読んで評価している。ところで、エリオットの代表作である『荒地』(The Waste Land, 1922) は、「四月は最も残酷な月である」(“April is the cruellest month”) で始まる。この一節は、中世イギリスの詩人、チョーサー (Geoffrey Chaucer, 1343-1400) の代表作『カンタベリー物語』(The Canterbury Tales, 1400) の冒頭、「4月の優しい雨は3月の渇きを根まで潤した」(“Whan that Aprille with hise shoures sote / The droghte of March hath perced to the rote”) を意識して書かれたものである。チョーサーは春の到来、生命の誕生を祝福すべきものとして4月を描いているのに対して、エリオットはおぞましい春の到来として4月を描いている。エリオットにとって、この世に生まれることは喜びではなく、人間に対する残酷な仕打ちなのである。なぜなら、人生に意味など見いだすことはできず、徒労に終わるだけの不毛なものとして捉えていたからである。『遺稿詩集』の“The Triumph of Life”は、これと同じような人生観が描かれた作品として読むことができるため、エリオットもこの作品だけは高く評価したものと思われる。

日本では、明治時代に「人生は不可解」という内容の遺書を残して日光の華厳の滝に飛び込み自殺した一高生の話を伝え知る文学愛好家にとって、『遺稿詩集』のテキストのほうが魅力的である。なぜなら、シェリーの死に関して自殺説がささやかれているためである。“The Triumph of Life”の執筆途中に、シェリーは自分のヨット、ドン・ジュアン号でイタリアのレリチ湾にあるサン・テレンゾ村の自宅からリボルノへ出かけた。その帰りに激しい嵐にあい遭難して亡くなるのだが、この溺死は本当は自殺であったのではという疑いがかけられている。悪天候になることが分かっていた、嵐に弱い船で出帆したこと。溺死する少し前に流産した妻のメアリと不仲であることに悩んでいたこと。いつまでたっても世間から詩人として評価されないことに落ち込んでいたこと (Jones, II, 382, 394) などが根拠として挙げられている。メアリとの不仲説については、シェリーの遺体が火葬に付されたとき、従兄妹のトレロニーは燃え残ったシェリーの心臓を妻のメアリではなく、欲しがっていた友人のリー・ハントに渡したエピソードを一つの根拠として挙げるができる。後日、周囲の者がハントを説き伏せて、ようやくメアリのもとに心臓が渡されることになった (Bieri 655) ののだが、最初に心臓を受け取ろうとしなかったメアリの態度に夫婦関係はかなり微妙な状況にあったことが推測される。こうした様々な事情から、「人生とは何ぞや 私は叫んだ」で終わる作品であった方が、バイロンのように脚光を浴びることなく不遇に終わった詩人の最後の詩としてふさわしいもの

になり、多くの文学愛好家の共感を呼ぶのであった。

しかしながら、手書き原稿に関する詳細な研究が進み、新たな部分が付け足され、多くの研究者によってライマンのテキストの方が定本としてふさわしいと見解が一致するようになると、この作品はやはり未完成であり、まだまだ書き進めるつもりであったと考えざるを得なくなった。そうすると、シェリーはこの後どのように書き進める予定であったのかが問題になる。シェリーの溺死についても自殺する意図はなく、単なる事故死であったことになる。シェリーの人生を振り返ってみると、若い頃から泳ぐことができないにもかかわらず舟遊びが好きであったため、少なくとも危険な目に二度あっている。一度目は1816年の夏で、スイスのレマン湖をバイロンと一緒にボートに乗って小旅行をした時のことである。突然、激しい嵐に襲われ、船が沈みかけた。バイロンは泳いで岸までたどり着くことができたが、泳ぐことのできないシェリーは死を覚悟しなければならなかった。しかしながら、幸運にも救助され一命を取り留めた (Jones I, 483)。もう一度はイタリアに渡ってからで、リボルノからピサへ夜に小舟に乗って運河を移動しているとき、同乗者の不注意で船がひっくり返り溺れかけた。この時も幸運にも同乗者に助けられている (Bieri, 567)。シェリーはこのような危険な目に遭っているにもかかわらず、馬よりも船を利用することの方が好きであった (Jones, II, 288)。乗り物での移動中に事故が起こることは、現代の自動車でもよくあることで、馬車や船の事故で命をなくす危険は当然あった。それを気にしていたのでは旅行することはできない。その事故がたまたま天気予想が外れたために、現実としてシェリーの身に起こったと解釈することができる。ヨットが難破し溺死したとき、シェリーがリボルノへ行った目的が、バイロンやハントと一緒に雑誌『リベラル』 (*The Liberal*) の発行について相談するため (Beire 645) であったことから考えて、これからも人類の未来のための行動を起こそうとしていたとみられ、このことから自殺する気はなかったと推測することができる。

では、“The Triumph of Life” がまだ執筆途中で、これから書き上げる予定の作品であったとしたら、どのような展開になることが予想されるのか。その手掛かりは、シェリーが亡くなる1年半ほど前の1821年2月から3月にかけて書かれた『詩の弁護』 (*A Defence of Poetry*) の中の次の一節に見つけることができる。

Poets, according to the circumstances of the age and nation in which they appeared, were called in the earlier epochs of the world legislators or prophets: a poet essentially comprises and unites both these characters. For he not only beholds intensely the present as it is, and discovers those laws according to which present things ought to be ordered, but he beholds the future in the present, and his thoughts are the germs of the flower and the fruit of latest time. (MW 677)

詩人は、現れた時代や国の状況にもよるが、世界のずっと昔の時代には立法者とか預言者と呼ばれていた。詩人は本質的に両方の性格を有しており、二つが結びついたものである。詩人は現在をあるがままにするどく見詰め、今ある物事が従うべき法を見つけ出すだ

けでなく、現在の中に未来を見つめるのであり、彼の思想はずっとのちの時代に花咲き実となる萌芽なのである。

引用の後半部分で語っているように、今の時代をきちんと正確に描写したうえで、その延長線上にあるべき理想の未来を描き出す、それが詩人の務めであるとシェリーは考えていた。この詩人の定義に従って書かれた詩として最も当てはまるのは、1812年から1813年にかけて書かれた初期の大作、『クイーン・マブ』(Queen Mab)である。この作品では、第一歌で、マブ女王がアイアンシーという少女を馬車に乗せて、天上の自分の宮殿に連れて行き、人類の過去・現在・未来を見せる。第二歌で、人類の過去が、第三歌から第七歌にかけて現在の状況が、第八歌、第九歌では目指すべき未来が、それぞれ長い注を添えられ詳細に描写されている。さらに、1818年から1820年にかけて書かれた『鎖を解かれたプロメテウス』では、第一幕でコーカサスの岩山に鎖でつながれたプロメテウスのもとへ復讐の女神フリアエ (Fury) がやってきて、次のように現実について語る。

The good want power, but to weep barren tears.
The powerful goodness want: worse need for them.
The wise want love; and those who love want wisdom;
And all best things are thus confused to ill.
Many are strong and rich, and would be just,
But live among their suffering fellow-men
As if none felt: they know not what they do.

(*Prometheus Unbound*, I. 625-31)

善なる者は力を欠き ただ不毛な涙にくれる。
力のある者は善を欠くが この欠乏の方がひどい、
賢いものは愛を欠き 愛する者は知恵を欠く
そして 最善のものはすべてこのように混乱し 悪となっていく。
多くのものは強く金持ちで 正しくもあろう
しかし まるで何も感じないかのように
苦しむ同朋たちの間で生きている 自分が何をしているか分かっていない。

人類が抱えている様々な不幸の真の原因は、最善のものがこのように混乱していることにあり、フリアエは指摘する。プロメテウスは悪の真の原因を知り、大変な精神的苦痛を味わうものの、かろうじて耐え忍ぶ。ところで、これと同じ趣旨の一節が“The Triumph of Life”の中にもある。「なぜ神は善とそのため的手段とが相容れないようにしたのか」(“why God made irreconcilable/ Good and the means of good” 230-31) と、こちらでは簡潔な形で表現されている。プロメテウスは第一幕で耐え忍んだ結果、第三幕一場で暴君のジュピターが運命の

力の象徴のようなデモゴルゴンによって奈落の底へ連れて行かれることで解放される。その後、永遠の美や愛の象徴である女性アジアとプロメテウスが結ばれることで、世界は愛に満ちた理想的な姿に変貌する。この筋書きに対して、当時の批評家たちはシェリーが望む世界の実現など不可能だと厳しい言葉で批判した。しかし、シェリーはこの批判に対して、理想実現のための戦いは、オペラでいえばまだ第一幕の終わりに差し掛かったようなもので、今の時点で騒ぎ立てるのは馬鹿げているとして、意に介さなかった³⁾。過去と現在を鋭く見つめ、何が本来あるべき未来かを読者に提示し、進むべき道を示すことが詩人の務めだというシェリーの考えは、1820年制作の「ヒバリへ」(“To a Skylark”)の中では非常に簡潔に描かれている。

We look before and after,
And pine for what is not:

私たちは前方を見て、後ろを振り返る
そして存在しないものに憧れる
(“To a Skylark”, 86-7)

このように『クイーン・マブ』を書いたころから死ぬまで、シェリーは一貫して同じ詩人としての使命感を持ち、作品を書き続けていたと考えられる。この詩人としての姿勢は、散文作品の中でも貫かれている。1819年から1820年にかけて書かれた『改革に関する哲学的考察』(“A Philosophical View of Reform”)の第一章では自由を中心とした歴史、第二章では当時のイギリスの現状などが詳細に語られており、その後の第三章において将来の改革に関することを語る形式となっている。同じころに書かれた詩、「自由へのオード」(“Ode to Liberty”)の中でも、自由の歴史に関して同様の記述方法がとられている。このように、韻文、散文を問わず、現実を忠実に描き、その後で人々が進むべき未来を示すことこそ詩人の務めだという考え方を、シェリーは若い頃から一貫して持っていたことを考えると、もし暗い現実だけを描いて詩作を終わらせることがあれば、それは自らの詩人の定義に反することになり、詩人として宗旨替えしたことになる。これは、詩人失格である。従って、“The Triumph of Life”も世俗的な欲望にまみれた人生の現実を描くことで終わるのではなく、最後の一行の「あの者たちは幸せ」の後に、本当に幸福な人生とは、本当に人生を生きるとはどういうことなのか、シェリーの考える理想を描こうとしていたと考えることが妥当なように思われる。ただ、30歳で亡くなったシェリーであるが、これまでのように理想を描いて作品を締め括ることに疑問を持ち始めていた可能性もある。“The Triumph of Life”だけを褒めたT・S・エリオットは、そのあたりのことを感じとっていたのかもしれない。

注

- 1) エルサレム近郊にあり、イエス・キリストが磔刑に処せられた場所である。
- 2) *The Use of Poetry and The Use of Criticism*, p. 81. 及び、*Selected Prose of T. S. Eliot*, p. 65
- 3) 1819年10月15日付のチャールズ・オリアー宛ての手紙。

引用文献

Shelley, P. B. *Percy Bysshe Shelley: The Major Works*, Ed Zachary Leader and Michael O'Neil. Oxford and New York: Oxford University Press (Oxford World's Classics), 2003. この本からの引用は MW と省略する。

—— *The Letters of Percy Bysshe Shelley*, Ed. Frederick L. Jones. 2 vols. Oxford: Clarendon Press, 1964. この本からの引用は Jones と省略する。

Bieri, James. *Percy Bysshe Shelley: a Biography*. Baltimore: The Johns Hopkins University Press, 2008.

Eliot, T. S. *Selected Prose of T. S. Eliot*. Ed. Frank Kermode. New York: A Harvest Book · Harcourt Inc, 1975.

—— *The Use of Poetry and The Use of Criticism*. Ed. Frank Kermode. New York: A Harvest Book · Harcourt Inc, 1975.